

お父さんの家事せんそう ありがとう

大関 幸

家が大へんなことになる。そう思ったのは

「二人とも、ここに来てすわって。」

と、お父さんとお母さんが言ったからだ。だいたいそう言われると、しかられるとか、よくないことがある時が多い。だから私はドキドキしながら、下を向いてすわった。きつとお兄ちゃんも同じ気持ちだったと思う。お母さんが話し始めた。

「あのね、お母さんは、家からいなくなります。でも二カ月です。仕事でけんしゆうに行くことになって、遠いからおとまりになるの。お父さんがその間、全ぶやってくれるからだいじょうぶだよ。」

と言った。私は、お母さんがいなくなるわけじゃないのに、聞いているうちになみだがこぼれてきた。大好きなお母さんとはなれるのがかなくて、どんな生活になるのかふあんになったからだ。

そして、お父さんの家事せんそうが始まった。

「おーい。おきてくださいーい。おーい。おきてー。おーい。おきろーつ。」

朝が始まる。お父さんは、私たちをおこす前に、朝ごはんを作って、私とお兄ちゃん、自分の三つのおべん当を作った。毎日毎日休むこともさぼることもなく作ってくれた。はじめのう

ちは、おかずの入れ方がゆるゆるで、あけるとおかずがあちこちにとんでいた。けれど、だんだんおかずがふえておべん当をあけるのが楽しみになった。

そして、お父さんは、私たちを学校までおくつて自分も会社に行つた。お母さんがいる時はさんぎょうでいつも帰りがおそかったのに、ちゃんと夕方にはむかえに来て、買い物をしていっしょに帰つて来た。

「いやあ、お母さんがいないと大へんだな。」

と言いながら、お父さんはせんたくをしてほした。やつと家事が終わると、お父さんはビールをのむ。でもそのうちにこっくりこっくりねてしまう。つかれているんだらうなつて心ばいになった。だから私とお兄ちゃんはずせんと皿あらいをしたり、せんたく物をたたんだりするようになった。お父さんの家事せんそうを少しでもお休みにしたくて。

二日だけお母さんが帰つて来た。私もうれしかつたけど、お父さんが一番うれしそうだった。お母さんといっぱいおしゃべりして、おいしそうにビールをのんでいるお父さんを見て、私もうれしくなつた。

「お父さんへ」

お父さん私たちを、心いっばい、体いっばい育ててくれてありがとう。お父さんのがんばりで、私も何でもがんばらなくちゃって思つたよ。お母さんが帰つて来たら、ごほうびに自分のやりたいことをやってね。私も、お父さんのように、自分をぎせいにして、人のためにつくせる人になるからね。お父さん、ありがとう。